

ビンゴとイブの 誕生レポート

山内イグアナ研究所 山内 多佳子

1996年に、山内イグアナ研究所で2匹のイグアナが孵りました。当時、私がつけていた日記をもとに、そのときの様子を皆さんにお伝えしたいと思います。

ビンゴ誕生

5月19日、夫婦で夜、外出から帰ってきた。そろそろ生まれなかなと期待しながら、私は台所の流し台の脇にあるインキュベーターに駆け寄り、そっと中のタッパーの蓋をあけた。背中に戦慄が走った。「いない！」

殻が、それこそ「もぬけのから」になっているのではないか。殻は柔らかく、ぺしゃんとしていた。パーミキュライトの上に何やら動いた跡があった。

この2、3日、実は、タッパーの中は見えていなかったのである。あまり、頻繁に開けると、最後の最後で温度や湿度がおかしくなっ

まうことも、十分ありえたからである。私は、大声で主人を呼んだ。「早く来てえ！卵が殻だけになってる！いないの！」

私は、そのタッパーの蓋を持ち、あとずさった。インキュベーターの中を調べるのが怖かったのだ。小さなイグアナの赤ん坊が、インキュベーターの水の中でおぼれていたら...と思うと、たまらなく恐ろしかったのである。

インキュベーターの水は、もうこの頃には、表面に薄い水カビの膜ができていたような、おかしい感じになっていた。この水の中に、何日もいたとしたら...。そして、この水を飲んでいたら...。変なバイ菌が体内に入り込んでしまったかもしれない。どうしよう。

生まれたという喜びと、その子が浮かんで死んでいたらという恐怖が入り交じり、私は興奮状態になっていた。



主人が急いでやってきて、あわててインキュベーターを覗き込んだ。その瞬間、「パシャ！パシャ！パシャ！」と、音がした。何と、小さな赤ちゃんイグアナが、主人のさしのべた腕に登ってきたのである。その時の、驚きと喜びは、口ではいい表せないものだった。

主人がその子を手の平に載せ、振り向いた。目が合った。ちゃんとトカゲの形をしていた。まちがいでなくイグアナだった。「ああ、生きてた！孵ったんだ。よかった…。本当によかったね。」私と主人は、本当にうれしかった。「はじめまして。パパとママだよ。」私たちは、かわりばんこに手に乗せて、写真を撮った。

最後、受精卵は5つ残っていた。

みな、中に、身体や手足、しっぽがあることが、光をあてると外からも十分確認できるものだった。ときどき殻の中で、グルッと体を回したり、手を握るようにしたりするのさえ見ることができた。それを見ながら、「ああ、この中に小さな命がいる！」と、どんなに感激したことだろう。

しかし、1つ、また1つと、最後になって、カビがはえてきて、しぼんでいった。2人共、その卵を割って、中を調べることはしなかった。ひどい奇形児が生まれる覚悟も、十分していたつもりだったが、殻を開けることはできなかった。

この世に生まれて出てくる前に、私たちより一足先に旅立ってしまった、かわいそうな子供たちの

ために、私たちは祈った。そして、そのたび、もう向うに行っているガニメデに、「そっちへ行った子供たちをたのむね。」と心の中で伝えた。そうしているうちに、残った卵は、とうとう2個になっていた。その中の1個から、生まれてきたのだった。

手乗りのピンゴ

赤ちゃんイグアナが主人の手のひらに乗ってしばらくすると、白い粉が宙に舞った。何かと思ったら、最初の脱皮だったのだ。赤ちゃんの全身が、インキュベーターから出て、乾いた瞬間、真っ白になったと思ったら、脱皮がこなごなになってフワッと飛んだのである。「すごい、もう最初の脱皮をしたんだね。」

手のひらに乗せて、いろいろよくチェックしてみた。みな、ちゃんとした場所に、それぞれのものがきちんとはいていたが、右目が、



半分しか開いていなかった。私は、不潔なインキュベーターの水につかっていたために、何かゴミが入っているだけで、そのうちよくなると最初は思っていた。

しかし、しばらくして、それは違うことに気がついた。真正面から彼女を見たとき、彼女の右の目は、左の目の位置よりも少し下についていることがわかったのである。まぶたの開き方も、やはり左より小さかった。でも、とにかく左の目は、ちゃんと見えているようだった。よかった。右目も、時折、ひとみを見ることはできた。ちゃんとした目がついているようだった。右目がとつてもよく開いて、私と目が合うと、私はとてもうれしかった。「あら、今日は、こっちでも見てくれたの！」

驚いたことに、この子は、少しも私たちを恐れない。手のひらでおとなしくしているし、顔や頭に乗って遊んでいる。ああ、やっぱり、人間への恐怖は、生まれてからの扱いにかかっているのだと実感した。

SVL: 77mm/ 体重: 15g/ 尾長: 220mm

その時は、もう、無事にこの世に生まれてきてくれただけで、十分うれしかった。子供のいない私たちには、孫になるのだろうかなどと、主人と笑った。

生き物を買ってきたときには、皆、そうするように、私は、何か食

べ物をあげたくなってしまった。試しに小松菜を差し出すと、ものすごい勢いで、2口、彼女はかじって食べてみせた。かわいかった。もうすでに1mをゆうに越す個体だけを相手にしてきただけに、小松菜についた小さな歯形が、たまらなくかわいかった。

その日は、午前3時すぎまでかかり、彼女の新しい家を、とりあえず空いていた45cm水槽で作った。入れた物はロックヒーターと水だった。ロックヒーターはつけ放しにした。最高最低温度計も、もちろんセットした。名前は、主人が「ピング」と名付けた。

ウンチ作戦

5月20日、翌日。不安と喜びでいっぱいのは、主人に仕事を休んでもらい、トルーライトのソケットを買いにいらしてもらった。

ピングはと言うと、お腹は、かなりパンパンな状態で生れてきていたが、翌日のこの日、彼女は、私が差し出す物を何1つ食べようとはしなかった。排便だけ1度した。

1日、食べなかつただけで、明らかにやせたのがわかった。主人は「産まれた直後のイグアナが最初に口にするのは、親のウンチである」という記述があったことを思いだした。そうだ、腸内最近ゼロの状態が生れて来ているのだ。なのに、私は出会ったその日、まだピングが

あの汚いインキュベーターの水しかしらないときに、消化のむずかしい葉っぱを与えてしまったのだ。血の気がひいた。ピングの胃腸はおかしくなっているに違いない。明日、さっそく実行しなければ。

確かにうなずけるものがあった。それは、今日、私はピングを鳥カゴに入れて、生まれて初めて直射日光浴をさせたのだが、中に、コルク材をいれておいたのである。そこに、以前誰かがしたウンチが固く乾いてこびりついていて、昼間、ピングは、しきりにそれを舐めていたのである。なのに、差し出す野菜には見向きもしなかったのだ。

21日、朝から、鳥かごに入れて日光浴させた。そして、ウンチ作戦を実行に移した。

直接の親ではないが、駆虫済みの元気なオスのイグアナのウンチを、水に少量とき、私の手の指につけ、それをなめさせてみたのである。舐めた！やはり本当なのだ。ピングは、私の差し出す指を、何度も舐めていた。葉っぱは、食べてくれないが、ちょこちょこ「ウンチ水」を舐めるピングだった。

22日、また朝から日光浴させる。天気がよくて何よりだった。この日も、葉っぱは何も食べてくれなかったが、私は、ウンチの効力を信じ、ひたすら「ウンチ水」をなめさせた。ウンチを摂取して2日では、腸内細菌はまだ安定しないのだろ

うか。

23日、朝、排便後、鳥かごで日光浴。また「ウンチ水」をなめさせた。そして、何と、この夕方、ピングは出会った19日以来、3日ぶりに差し出した小松菜を2口食べてくれたのである。

24日、この日から、ウンチを水にとくのをやめ、ウンチそのものを彼女の口元に持っていくことにした。葉っぱ以外の初めての固形物だったはずだ。彼女は1口だけなめた。そして、小松菜も1口食べたのである。

25日、午前中日光浴。今日は、ウンチを舐めるというより、パクパクと食べた。水を飲ませるついでに、小松菜を差し出すと、1口食べた。そのあと、かなり時間をかけて3口食べた。排便はしたが、固めの尿酸が気になった。

26日、午前中日光浴。こんどは、違う子のウンチにした。彼女は少し食べ、その後小松菜も6口食べた。小松菜を食べる量が増えてきた。いいぞ、ウンチ作戦はうまくいきそうだ。

体重:14g。初めて出会った日測定した15gから1g減ってしまった。

27日、体重は1g減っていたものの、今日は、もう何口食べたなどと、数えられない程、たくさん小松菜を食べてくれた。ようやく、お腹の調子が安定し、腸内細菌も息づいてくれたのだろう。今日で、ウン

チを食べさせるのはおしまいだ。

成功だ。私は、とてもうれしかった。生まれて以来、ずっと直射日光浴をしていたのも、よかったのかもしれない。

28日、今日はもう、他の野菜も与えてみようと思った。小松菜と、ゆでてつぶした枝豆と、カボチャの煮たものだった。みんな喜んで食べた。

29日、小松菜の他に、チンゲンサイもあげてみた。

30日、豆腐をあげてみたところ、とても喜んだ。パンは好きではなく、「いらぬ」と表現した。これは、1年経った今でも変わらない。この子は、完全に「葉っぱ&野菜主義」なのだ。

31日、今日はフルーツもあげてみたかった。カルシウム:リン比率は悪いのを承知していたが、奮発してメロンをあげた。ことのほか喜び、ついでに、咲いていたペチュニアの赤い花びらも食べた。

6月1日、もう、大丈夫だ。私の気持ちも落ち着いた気がする。食べる量も、増えて来て、ピングのペースもつかめてきた。とても元気で、やんちゃだ。

SVL:80mm/ 体重:17g/ 尾長:230mm

6日間で3g増えた。

2日、今日は、いつものメニューに、おからもあげてみた。これからは、いろいろ食べさせていこう。もう安心だ。アメリカから取り寄せ

た幼体用の餌も新しく開けた。少しあげたら、とても好きなようだった。ちょっと水でくずして、小松菜に乗せて与えた。

ここで、生まれてからのピンゴの食欲をまとめてみる。

19日・小松菜2口

20日・なし

21日・なし・ウンチ水

22日・なし・ウンチ水

23日・小松菜2口・ウンチ水

24日・小松菜1口・ウンチそのものを1口

25日・小松菜4口・ウンチをばくばく

26日・小松菜6口・ほかの子のウンチをばくばく

27日・小松菜たくさん・ウンチは終了

28日以降・小松菜はじめ野菜いろいろを食べ始める

イブ誕生

そして、運命の3日がやってきたのである。

6月3日、その日は、ピンゴにモロヘイヤもあげてみていた。とても元気だ。夜、7時、そろそろ夕飯の支度をしようと台所に立った際、最後の1個は、どうだろうと覗いてみることにした。

「あ!!」。タッパーの蓋を持った手が震えた。落としちゃいけない! しっかり持たなきゃ。頭が、何と卵から、赤ちゃんの頭が出ていたので



ある。頭はこちら側から出ていて、私からは、頭のとっぺんが見えるかたちだった。頭だけがチョコンと出ているのだ。「ああ、どうしよう。どうしよう。」どうしようもなかった。見守るのだ。主人は恐らく、もうすぐ帰ってくるにちがいない。写真を撮っておこうか、いや、フラッシュなんていたら、目に悪いし、驚くかもしれない。私の胸は高鳴った。心臓が破裂しそうだった。よく見てみると、小さな小さな、ものすごくかわいい頭だった。目は閉じている。私は、そっとタッパーの蓋をもとに戻した。

あまりの興奮に、当時、よく書き込みをしていたパソコン通信の会議室に書き込んで送った。パソコンを打つ指が震え、とても時間がかかってしまったが、それをタイムリーに見ていた、「イグアナ3」の制作担当だったエンジェル・ウィープの山口さんから、お祝い

と激励の電話をもらった。とってもうれしかった。私は、感激を分かち合えたことで、ともしあわせになっていた。そして、とにかく早く主人が帰って来てくれることを祈って待っていた。

8時頃、帰ってきた彼に、私は何を言ったのか覚えていない。彼いわく、彼もよくわからなかったそう。彼の眼が光った。彼も興奮している。彼は、タッパーをそっとインキュベーターから取り出し、写真を撮ると言い出した。私は、ちょっと反対の気持ちもあった。そっと見守ってあげたい気持ちだった。けれども、こんなすばらしい瞬間を、記録として、残しておかない手も、やはりなかった。部屋の温度は暖かった。蓋をとったので、湿度はどっと減っただろう。でも、その子は、頭を出している所を、彼に何枚も写真を撮ってもらったのである。ときどき、グルッと、頭の位置を変えた。そして、時折、薄く目を開けた。



「わー、見たよ。」その瞬間、私は、またバカみたいに「ママよ！」などと口ばししていた。写真を撮り終え、すばやく、またインキュベーターにもどした。体が全部出るまでには時間がかかることを知っていた私たちは、手早く夕飯をすませた。何を食べたか、何を話したのか、どちらも覚えていない。

がんばれイブ

夕飯をすませ、先を争うようにインキュベーターにかけつけた私たちは、そこに、もう体を半分出してがんばっている彼女を見た。ときどき動きながら、体を回すようにして、殻から抜き取ろうとしていた。

その体を見た瞬間、今まで洋書などで見て来た、赤ちゃんとは違うことが一目でわかった。そう思うと、確かに、目も、何か少し大きく膨らんでいるように見えた。顔はちょっとカマキリみたいで、体は、まるでサラマンダーみたいだった。色は、緑色ではなく、黒に近かった。お腹の方など、まるで腐ったような茶色と黒と白が混じりあっていた。

「何か普通じゃない...。」この恐怖も、誕生の喜びといっしょに、私たちの心をしめつけた。そして、もっと驚くことが起きてしまったのだ。

何...コレ...。最後、全身が出た瞬間、体の半分以上はありそうな、黄



色いものがお腹にくっついて出てきたのだ。それは血管で包まれていた。これから成長するために、卵の中にいる間に、普通は体内に吸収されるべき栄養分だった。ヨークサックだ。まちがいない、この子はものすごい未熟児なのだ。やっぱり普通じゃない。

目は、異常に飛びだしていた。最初より、飛び出したように感じる。ときたま、一瞬だが、ゆっくりとうっすら開けるだけで、ほとんど閉じたままだ。前の手は2本共内側を向いて、体の下に折りたたまれるようになっていた。日本の幽霊の手のようにして、手をお腹の下に敷いている感じだ。ちゃんとつけないのだ。どうも骨の形成も、まだできていないらしい。私は、心

が沈んだ…。

しかし、そのとき、彼女は、その大きなヨークサックをつけたまま、歩こうとして、ゴロンゴロンと転がったのだ。歩こうとしている。生きようとしている。がんばっているんだ！私は、弱気を悔いた。いっしょうけんめい生きようとしている彼女を、何としても、助けなければならぬ。いっしょになって、生きていかなければならないと、私は自分に言い聞かせた。

私たちは、すばやく行動し始めた。一刻の猶予もない気がした。もう、水を張ったインキュベーターに入れておくことはできなかった。うまく動かない手足を動かし、タッパーから落ちてしまい、今度こそおぼれてしまうかもしれない

し、パーミキュライトも、濡れたような皮膚全体にくっついている。

緊張の一夜

私たちは、急いでもう1つ45cm水槽を用意した。しかし、今度はピンゴとは設定が違った。明らかにまだ、卵の中に、インキュベーターの中にいるべき子なのだ。できるだけそれに近い状態で、かつ水槽で保ってやらなければならないと思った。もう自分の意志で出てきたのだから、ピンゴと同じ状態でもいいのではないかとも思ったが、この子を見ると、とても普通じゃないのが明らかだったので、急激な環境の変化を与えないよう、インキュベーターとなるべく似た環境にすることに決めた。

ホットストーンを温め、水でぬらしたタオルで巻いて水槽に設置した。手足がよく動かない上に、体の半分もあろうかというヨークサックがついているので、ちょっとした段差で、転がったりしない



よう、暖かく濡らしたタオルで、水槽内を敷き詰め、段差をなくした。

小皿に一応水を張り、水槽のすみに置いた。最高最低温度計と、湿度計を入れた。湿度90%以上、温度が30度になった瞬間、彼女をこの水槽内に移した。

生まれ出たときから、喜びと緊張と、そして悲しみで、私の心を占領したこの小さな子は、こうして私の一部になった。

私は、この夜、徹夜を決心した。とても眠れなかった。私がこの子を守ってやらなければならないと思った。主人には、また翌日、会社を休んでもらうことにして、朝、パトントッチをしてもらうため、先に休んでもらった。さあ、今夜は、私と、この子だけだ。「ママだよ…。さあ、いっしょにがんばろう」。

この設定にしたのは、賭けだったので、時折、やっぱりこれでいいのだろうかと思ったりした。でも、せめて、 tonightは、湿度90%以上を保ち、30度を維持してみよう。ホットストーンを包むタオルが乾くと、私は夜通し、同じ温度の水をかけ、湿度と温度をキープした。

彼女は、しばらく動かないかと思うと、ときどき、ゴロンゴロンと転がった。その、濡れたタオルの上で転ぶわずかな音でも、私は聞きもらさなかった。うとうととしても、すぐ飛び起きた。

朝が来た。彼女は生きていた。何

となく、大丈夫だと感じた。感のようなものだ。主人が起きて来たところで、私は少し仮眠することにした。主人は、午後から会社に行くことになった。午後、また、私とこの子だけになった。体の半分はあるヨークサックだったが、一晩たって、少しも体内に吸収されているとは思えなかった。この栄養が全部、本来なら体内に吸収されてから出てくるのだとしたら、すぐにも栄養を補給しないと、この子はダメになってしまうかもしれない。

私は、試しに水を飲ませてみようと思い、手の指に水のしずくをつけ、彼女の口元につけてみた。その瞬間、彼女はパニックになって動かない体を転がせ、痙攣し始めたのである。

その時の恐怖は、これ以後、何度も味わうことになった。彼女は水が口につくと、決まってパニックになるのだった。みるみるうちに、体中の血管が浮き出るような色合いになり、目をつむったまま、激しく全身を痙攣させるのだった。そのたび、いつも私は、このまま彼女の心臓が止まってしまうのではないかという恐怖に襲われた。

後に、彼女を触ろうとするときにも、このパニックはやってきたのだが、私は、必ずパニックの彼女を手を抱きしめ、パニックがおさまるのを待った。そして、「死ぬな！」と何度、泣いたかわからな

い。いっしょうけんめい話し掛けて、彼女を落ち着かせ、安心させようとしたことが思い出される。

太陽を信じて

部屋に差し込む光の中で、あらためて彼女の全身をよく見てみた。右腕が、やはり折れ曲がっており、体の下にもぐり込む感じになっている。ヨークサックがあるので、真下を向けないにしても、やはりおかしかった。腕がつく場所が少しおかしいのかもしれない。左手は、親指と人差し指がくっついており、中指の途中から人差し指が出ている感じだった。そして、両方の手が、手首から先、うまく動かないらしい。歩くたびに、別々の方向に手首が折れ曲がるのだった。昼間の湿度は78%位、温度は同じだった。

彼が転がるたび、ヨークサックが敷いたタオルにこすれて、中身がどんどん出て行った。じっとしていてくれればいいのに、動くから、栄養がお腹に入る前に、こうしてダメになっていったのだ。また、彼女自身、歩くのにじゃまなのか、後ろ足でヨークサックを取ろうとするような動きさえしてみせたのである。後足でしきりにヨークサックを引っかいていた。

湿度をやはり求めたのか、その日の午後、しばらく自分で小皿の中の水に入っていることがあった。自分から求める分には、水は恐く

ないらしい。この状態で主人が帰って来るのを待った。

帰って来た主人は、湿度がもう高いのではないかと言った。相談して、ピングと同じ水槽の状態にすることにした。突然の変化だが、彼女は耐えられるのだろうか。わたしたちは、やっとこの日になって、この子の名前をつける心の余裕ができた。「イブ」と名付けた。

5日、ついにヨークサックを後足で蹴って取ってしまった。お腹には、ちょうどへその緒のようなヨークサックの残骸がぶら下がっていた。もうヨークサックからの栄養補給はなくなったのだ。

この日、初めて15分間、イブをもう、直射日光に当てたことが書かれている。これも賭けだった。時折開ける、つぶらな目には虹彩がなく、漆黒の目だった。これを直射日光にあてていいのかどうか、はっきり言ってわからなかった。

虹彩がないということは、紫外線が直接網膜に届いてしまうということだ。目が完全に見えなく



なってしまうかもしれない…。でも私は、この子がもう、この世界に出て来たかったのだから、太陽に、すべての生物に力を与えてくれる太陽にすがろうと心に決めた。それに、骨格がまだ、正常には作られていないことが明らかだったし、ヨークサックからの栄養も期待できないとすれば、もう、栄養補給をしながら、日光に当たり、体の調子を整えていくしかないと思ったのだ。

この日、ピングといっしょに、初めてイブも測定した。

ピング：SVL:82mm/ 体重:18g/ 尾長:235mm

イブ：SVL:69mm/ 体重:13g/ 尾長:170mm

栄養補給

6日、相変わらず口元を湿らせるとパニックになることを承知で、私はこの日から、日光浴の合間に、水にウンチを混ぜたり、混ぜなかつたりして、彼女の口元をいく度となく湿らせることにした。また、その水には栄養剤も混ぜることにした。そして、この日は、朝1時間、夕方1時間、直射日光浴をさせている。

7日の記録は残っていない。きっと、6日と同じウンチと栄養の入った水を舐めさせたに違いない。

8日、初めて、排便してくれた。といっても、硬い尿酸の固まりだった。私は、今でも記念として、このイブの便を大切に持っている。

生れて5日、そろそろタンパク質もとらせようと思った。ピンゴがすでに喜んで食べていた、アメリカ製の幼体用フードだ。これは、半モイストタイプで、このままでも食べられるのだが、これをウンチ水の中につぶした。その水を、そっとイブの口に塗った。「舐めた！よし、いいぞ。」イヤがる様子は、なかった。実は、この子は、まだ食べるということができなかった。ただ、舐めるのである。

9日、今日は濃い水を作った。とにかく水にいろいろ入れるのだ。今日はフードに、クロレラと豆腐を溶いた水を作った。また、この日、イブは初めて土を舐めている。

その後、12、13、14日と、排便があったことだけ書かれている。

16日、2匹を測った。

ピンゴ：SVL:82mm/ 体重:21g/ 尾長:240mm

イブ：SVL:72mm/ 体重:12g/ 尾長:180mm

イブは、身体が大きくなっているのに、体重は1g減っていた。

18日、この日、イブは、豆腐、グリーンピース、クロレラ、イースト、モロヘイヤパウダー、幼体用イグアナフード、煮たかぼちゃを混ぜたものをペーストにして、小松菜に乗せて食べている。

イブが、目がよく見えないということは、すぐにわかった。食欲もピンゴと比べると少なかったが、口をツンツンと葉っぱでつつくと、「あ、ごはんだ！」とわかるらしい。



私は、なるべく同じ声の調子で「イブ、ごはんよ！」と繰り返しながら、イブを手にとり、食べさせた。目の見えない彼女に、私とごはんを、どうしても結び付けて、恐くないことを教えてあげなければならなかった。目が見えないとしたら、他の5感が発達するはずだ。

時は流れて

イブが生まれて数日は、夢中だったらしく、きちんと日記をつけていなかったのが残念だ。最初に、初めて「水」でなく「小松菜」を食べてくれたときは、あまりのうれしさに、小松菜の写真を撮ったほどだ。

しかし、手にとって、水槽から出そうとすると、ピョーンと飛び跳ねて、後ろ足だけで、部屋を走り回り、その後、体の色を真っ黒にさせて、全身痙攣するのが、何日も続いた。でも、日光浴させなければならなかったし、栄養の入った水を与えない訳にはいかなかった。

毎日、痙攣するイブを、今死ぬ

か、今死ぬかと抱きしめて、泣きながら世話をしたように思う。

10月21日、突然、記録が飛んだ。何故、この日を書いたかという、ピンゴが、イブに向かって初めてボピングをしたからである。今まで、ずっと、ピンゴは温室、イブは水槽で別々に育てて来た。イブは目がよく見えないので、へたな段差で骨折したり、目を何かで傷つけたりしないよう、水槽にタオルをしきつめ、柔らかいものだけの中に入れて育ててきた。でも、午前中の日光浴は、日当りのいい場所に座布団をおき、2匹いっしょに日光浴させていたのである。しかし、もう、いっしょに日光浴はできない。イブは、目が不自由な上、少しまだ両手が不自由なので、すばやい行動ができない。ピンゴに体の上られたりする際に、爪が目に入ってしまう危険もあった。それからは、小さいイブを鳥かごに入れるようにしたのである。



現在

1997年5月、ピンゴは、とても大きくなり、居間でラビオリ()とアンギユ()といっしょに放し飼いいになっている。まだ、雌雄はハッキリしないが、メスのような気がする。ものすごい食欲で、未だこんなによく食べる幼体を見たことがない。それも、本当に葉っぱが1番好きである。これが本来の姿だと思う。植物質100%で育てたので、体が硬く引き締まっていて、見事なボディである。

右目は、あいかわらずあまり開かないが、元気いっぱい、毎日しゃいでいる。背中中のトゲが長くてきれいになった。何だか他の子より手の指が長いように見える。

イブは、あれから、水槽を卒業し、ピンゴのいた温室をもらった。最初は、見えなくて下に落ちると悪いと思い、最上段だけを使っていたが、とてもよく運動するし、イグアナの記憶力がよいことを信じて、その後、もう1段下まで行けるようにした。最近、さかんにかわいいボピングをするようになり、ピンゴよりそけい孔がハッキリしているので、オスではないかと期待している。

私が、あまりにキスせめにする、「もう、ママったら、やめてよお！」という感じだ！とてもかわいい。食べてしまいたいくらいだ。

イブは、オスの方がいい。メスだ

と、卵を持つ可能性があるからだ。イブは未だ骨格が未熟なのだから、卵殻形成の際に、体内のカルシウムを卵に取られてはたまらない。

でも、イブが、オスであれメスであれ、他のイグアナといっしょにすることはないだろう。イブは、生涯、私といっしょだ。いつも私の目の届くところに置くつもりである。

私が、温室を覗き込むと、イブは振り返るようになった。確かに、彼女なりに何か見えているようで、私はとてもうれしく思っている。でも、時折、目が普通には見えていないことを考えると、いたたまれなくなってしまう。かわいそうで、かわいそうで、しかも、そんな体にして送り出したのは、私だと思ふとたまらないのだ。たとえ目が見えなくても、「しあわせ」だと感じてもらいたい。そんな毎日を過ごさせてあげることが、私の義務でもあると思う。わたしたちが、この世に導いてしまった2つの小さな命。大切に大切に育てていきたい。

こんな経験でも、同じイグアナを愛する方たちの、何かの参考になれば、これほどうれしいことはありません。最後に、私がイブに捧げるお粗末な詩を書かせていただいて、山内イグアナ研究所の「ビンゴ&イブ日記」を終わらせていただきます。

「イブへ」

イブ、最期まで、いっしょだよ。

この青い大空を
暖かなお日様を
真っ赤なハイビスカスを
おまえに見せてあげたい。

そして何より
おまえをこんなに愛する
私の顔を見てほしい。

でもきっと
おまえは視力以外の力で
万物を感じているはず。

さわやかな風がふくと
おまえはすがすがしい顔をする。
お日様が差すと
おまえはこれを待ち望んでいたか
のようなしあわせな顔をする。

そして何よりも
私の手にのるとき
私のおいをかいで安心するイブ。
どんなに寝つきが悪くても、
私の胸に入れると落ち着いて
眠るイブ。

ママがついてる、
ママがついてるよ！